

子どもの確かな人権意識を育てる学習について

-みんなで輝くために-

県立青翔高等学校 教諭 奥部真二
Okube Shinji

要 旨

現在すべての高等学校において、「人権」にかかわるホームルームの取組が定着し、展開されている。本校においても、同和教育から人権教育への大きな流れと広がりをつまえながら、心に響く人権学習ホームルームの在り方を模索してきた。

すべての教育活動の基本となる人権意識の高揚を目指して、「人権」をより身近なものとして感じることができるようなホームルームの展開方法について研究した。

キーワード： 人権学習ホームルーム、アサーティブネス、自尊感情、「輝き」

1 はじめに

これまで様々な手法で人権に関する取組が展開され、その成果として、子どもたちの人権意識は全体として着実に高まってきていると言える。しかしながら一面では、他の生徒を傷つける言動やいじめ、またそれらがきっかけとなって起こる不登校などの問題も少なくない。これらの問題に対処する取組の一つとして、人権学習ホームルームの果たす役割は大きいのであるが、定期的に行われる人権学習ホームルームが、果たして「その場だけ」のものではなく、子どもたちの日々の生活に根ざしたものとなり得ているだろうか。また、お互いが自他の存在の尊さ（「輝き」）に気付いているだろうか。ここでは本校第1学年において、人権学習ホームルームを人権尊重の姿勢と態度を養う機会として、有効に機能させる方途について考察した。

2 研究目的

子どもたち一人一人の自尊感情をはぐくみ、お互いの気持ちを思いやることの大切さに気付ける人権学習ホームルームの内容とその展開方法について研究する。

3 研究方法

- (1) 人権尊重の基本的な姿勢と態度を養うための人権学習ホームルーム計画の作成
- (2) 日常の学校生活と人権学習をリンクさせる取組の工夫
- (3) 子どもたちの意識とその分析

4 研究内容

- (1) 人権尊重のための基本的な姿勢と態度を養う人権学習ホームルームの計画

ア 各学年の目標

第1学年 人権意識の高揚を図り、よりよいなかまづくりを目指す

第2学年 差別の現実や歴史に学び、人権問題についての正しい認識を身に付ける

第3学年 進路を踏まえて、一人一人の人間を大切にする精神を培う

イ 各回のテーマと内容 (2007年度第1学年)

1回目	日時：2007年5月16日(水) 4限
テーマ	なかまづくり ～アサーティブ・コミュニケーション～
内容	お互いを認め合えるなかま集団づくりの基本となるアサーティブネスについて体験的に学習する。それぞれの課題について、どういう言い方をすれば相手の気持ちを傷つけずに自己の主張ができるかを、グループに分かれて話し合い、発表する。
2回目	日時：2007年6月13日(水) 4限
テーマ	生きることの大切さを考える ～セルフ・エスティーム(自尊感情)～
内容	フォトランゲージのワークを通して、グループ内でいろいろな気付きや発見を共有する。人間は様々な人に支えられて生きていると同時に、だれかの「支え」になっていることを確認し合うことによって、「自分の存在の尊さ」に気付かせる。
3回目	日時：2007年9月12日(水) 4限
テーマ	人の「輝き」って何だろう? I
内容	奈良県人権施策課作成の啓発冊子(『幸せ』って何だろう)を教材とし、これまでの自身の経験をワークシートに記入する中で、「他人と比べる」ことの上に形成されてきた自分の価値観に気付き、「輝いて生きる」ことの意味を考える。
4回目	日時：2007年10月10日(水) 4限
テーマ	人の「輝き」って何だろう? II
内容	前回の人権学習ホームルームで行ったワークシートの集計を基に、他の生徒の経験や思いを共有し、ともすれば能力、生産性偏重の価値観に縛られがちな私たちの考え方を見つめ直し、自他の「輝き」を認め合うことの大切さに気付かせる。
5回目	日時：2007年11月21日(水) 4限
テーマ	部落史(1) ～自分の中の大切なものを守るため、輝いて生きた人たち～
内容	人権講演会の内容の振り返りを導入とした後、古代から水平社創立までの歴史を概観し、部落差別の起こりと民衆の意識について学習する。また、差別解消に向けて立ち上がった人たちの思いと、人間の「輝き」を取り戻そうとする営みの尊さに気付かせる。これまでの一連の人権学習(アサーティブネス→自尊感情→「輝き」)の中で、他の事項との関連性を意識しながら進める。
6回目	日時：2008年1月16日(水) 4限
テーマ	部落史(2) ～解放令から水平社創立まで～
内容	解放令から水平社創立までの歴史をビデオ教材を通して学習するとともに、差別が解消されなかった背景にある民衆の意識と、以前に学習した「ねたみ」「さげすみ」の意識との共通点を見出すことで、自分の問題としてとらえさせる。
7回目	日時：2008年1月30日(水) 4限
テーマ	部落史(3) ～水平社宣言から学ぶ～
内容	水平社宣言に込められた被差別民衆の差別撤廃を願う思いに触れ、「人間の尊厳」について考えさせる。また、以前に学習した「輝き」と関連させて、よりよいなかまづくりにつなげる。

(2) 日常の学校生活と人権学習をリンクさせる取組の工夫

ア 学習を積み重ねるための工夫

各回の人権学習ホームルームが終わるたびに、子どもたちが折に触れてその内容を思い返すことができるよう、教員が要点をまとめた「振り返りシート」(写真1)を教室に掲示していき、常に生徒の目に触れるよう工夫した。多くの生徒が休憩時間や放課後の雑談の中で、その掲示物の内容を話題に挙げ、クラスで話し合ったことを思い出していたようである。

イ 人権作文の取組

夏期休業中の宿題として、身の回りの事柄を「人権」の視点から考え、それを作文にするよう指導した。この取組の中で、教員は子どもたちのふだん見ることのできない一面を見ることができた。過去のつらかった思い出や経験を総括し文章にすることで、彼らはまた一步、人間的に成長し、より広い視野で自分の生き方を見つめることができつつあるように思われる。また同時に、教員は個々の生徒の新しい面に気づき、その思いを共感的に受け止めることにより、後のかかわりに生かしていくことができた。

ウ 人権委員会の取組

高解研(奈良県高等学校部落解放研究会等連絡会議)の夏期研修会に人権委員会より2名が参加した(写真2)。ピースおおさか、コリアタウンなどを見学し、後の文化祭においてその研修内容を人権委員会全員で展示発表した(写真3)。研修会に参加しなかった生徒も、「これは何の写真?」「こんなことがあったのか」などと言い合いながら、全員が熱心に展示パネルの作成に取り組んでいた。数人の生徒を核として、メンバー全員が何らかの形で人権にかかわる活動に参加することができたことは、彼らにとって良い経験となった。



写真2 コリアタウン御幸森神社にて 写真3 文化祭での展示

エ 人権講演会

田中君代さんを講師としてお招きし、障害者問題(命の大切さ)をテーマに講演会を行った。田中さんは、マルファン症候群で若くしてこの世を去った息子さんの生きざまと、母親としての思いを、数々の思い出話を交えて語られた。子どもたちはその講演に深く感動し、今までの自分の経験や生き方と、田中さん母子が共に歩まれた人生の軌跡とを重ね合わせて考えることができたようである。

オ 水平社博物館見学

部落史学習のまとめとして、1年生全員で水平社博物館及び周辺を見学した(写真4、5)。事前学習を踏まえて、実際に水平社発祥の地を訪れ、当時の人々の鼓動に触れることで、人間解放への熱い思いが身体の内部まで伝わってくるように思われた。



写真4 水平社博物館

写真5 西光寺前にて



写真1 振り返りシート(教室掲示)

(3) 子どもたちの意識とその分析

3回目のホームルームで使用したワークシートの中で、子どもたちは自身の経験や思いを素直に綴ってくれた。以下はその内容を整理・分析したものである。

ア 他人と自分を比べた時に生じるポジティブな感情とネガティブな感情

(ア) 「他人の能力や成果をうらやましく思い、それを刺激に努力しようと思ったことはありますか」という問いに対して

- 中学時代に仲の良かった友達が県内の進学実績で有名な高校に進んだとき。自分もこれからがんばって勉強しようと思った。
- 中学の時、何でもできる友達がいてうらやましく思った。その友達に何か一つでもいいから勝ちたいと思い努力したことがある。結局遠い存在のままだったけど、その子のおかげでいい刺激になったし、楽しさが増した。
- 中学のクラブで僕はレギュラーではなかった。試合に出してもらえないことが悔しかった。自分なりにどうしたら上達するかを考え、ある日チームメイトのやり方をまねしてやってみると、案外うまくできた。それからは楽しくなって家に帰っても練習をし、最後にはレギュラーになれた。このことを僕は一生忘れないと思う。
- テストの点が20点も高い友達に勉強を教えてもらい、テストの点が20点も上がった。

「自分もがんばって～しようと思った」という気持ちが共通している。「うらやましく思った」や、「悔しかった」などの気持ちになるのは自然なことでもあるが、そこでとどまらず、「自分も」と前向きな気持ちをもっている。「ある日、チームメイトのやり方をまねしてやってみると……」や、「20点も高い友達に勉強を教えてもらい……」のように、友達から学ぼうとする謙虚な姿勢が見られる。また、「結局遠い存在のままだったけど……いい刺激になったし、楽しさが増した」のように、結果的に相手に及ばなくても、本人が自分自身のプラスになっていることに気付いている点も重要である。

(イ) 「他人の能力や成果を見て自信をなくしたり、相手の幸福をねたんだり、あるいは、だれかをさげすむことで、自己の劣等感を慰めようとしたことはありますか」という問いに対して

- 自分が今一生懸命になっていることで、ある人が自分よりあとで始めたのにうまくたりすると、イヤな考えですが、その人がミスしたりしたら少し喜んでしまいます。
- テストの点数で、自分はその人のようにはなれないとあきらめたり、自分より点数が下の人を内心で見下し、「自分の方が上だ」と思ったことがある。
- 自分にもできることを友達がして、それでその友達がほめられたりしたら、なにかイヤな気持ちになる。
- 妹はがんばり屋で自分は面倒くさがり。姉妹で比較された時、自分はいつも素直になれずひねくれてしまう。そんな妹に対して数えきれないほどねたんだりさげすんだりした。でも最近になってようやく恥ずかしいことだと自覚した。そして落ち込んだ。
- 中学の時、あるテストで100点満点中21点を取り自信をなくしたが、友達が9点だったので「自分はまだマシ」と思い自信を取り戻した。

自分の中にこういう感情があることに気付くことはとても大切なことである。この回答によると、「ねたみ」の気持ちを抱きやすいのは、何かで先を越されたり、自分より他の人がうまくいったりした時、また、「さげすみ」の気持ちを抱きやすいのは、自信をなくした時のようである。このような感情は、だれの心の中にも起こりやすいが、自覚されにくいところがある。自己を見

つめることにより、「恥ずかしいことだと自覚」できたことは、大きな「気づき」と言える。

イ 「輝き」のとらえかた（『輝き』を感じる人はどんな人ですか」という問いに対して）

- ・何事に関してもよくできて、人付き合いもいやつ
・部活と学業を両立させている人 ・結果を残す人
- ・何度も同じ事でミスっていても練習し続けている友達
・一生懸命がんばる人。そういう人は出た結果がどうであれ、かっこいいと思う
・何事にもまじめに取り組んで常に周りのことを考えている人
・夢に近づけるよう毎日努力している人
- ・他人の意見に流されず、常に自分の意志で生きている方からは輝きを感じます
・困っている人に声をかけたり、友達のちょっとした変化にも気づいてあげられる人
・自分の好きなことを楽しそうにする人 ・人を思いやれる人
・だれとでも話せる人 ・いつもにこにこしている人
・充実した日々を過ごしている人

これらの回答は、「輝き」というものに対して、多種多様な考え方があることを示している。

「成功すること・何でもできること」「がんばること」だけでなく、「ごく身近なこと」にも目を向けている子どもたちが多くことに着目したい。自分の身近なところに「輝き」を見出している子どもたちが少なくないということである。これらを手がかりに、「だれしものが生まれながらにして持っている『輝き』」に気付かせることをねらいとして、後のホームルームを展開した。

ウ 1年間の人権学習ホームルームを終えて

3学期に入り、この1年間の学習の中で、子どもたちが学んだことや感じたことを、アンケート形式で自由に記入してもらった。ここでは子どもたちの大きな「気づき」が見られる。

- 自分もいじめられたことがある。だから友達がいじめられてても、そのいじめがまた自分の所に来たらつらいから、いつもかかわらないようにしてた。でも人権講演会の時の話を聞いてそれじゃだめなんだって思いました。自分は絶対に一人では生きられない。友達や周りの人に助けられ、助けて生きていくんだって。講演の最初に「自分のことが好きですか」という問いかけがあったけど、私は正直、自分が嫌い。いつも素直になれない、わがまま、つい人を傷つけるようなことを言ってしまう。だから、これから少しずつでも自分で嫌な所を直して、いつか自分のことを好きになれたらなって思いました。
- 自己主張という言葉が嫌いでした。なぜなら私は自己主張が苦手で、自己主張をたくさんする人も嫌いです。自己主張をしなければ円満にできると思っていました。でもアサーティブネスの学習で、自己主張の本当の意味と大切さを知りました。このことで私は生涯影響を受けると思いました。
- 9月と10月に人の輝きについて考えたとき、自分にも輝けることがあるかもしれないと思えた。少しだけ救われたような気がした。
- 人の輝きについて学んで、人はみんな輝きをもっていて、本人や周りの人がそれに気付いてあげられるかどうか、その人が本当に輝けるかどうかにつながっているんだということに気付きました。やっぱり人は一人では輝くことはできないと思いました。
- 笑うしかないと思っていた自分がいたけど、泣くこともできるとわかった喜びを感じました。

人権学習の取組をきっかけとして、それまでの自身の経験や思いを総括できている。「自分が嫌い」「笑うしかないと思っていた自分」など、自分の弱さに気付くことは勇気のいることであるが、あえてそれに向き合うことで、人間としての未熟さを真摯に認め、そこから自己を向上させようという前向きな気持ちがうかがわれる。

多くの子どもたちが、「結果を残すこと」「がんばること」「努力すること」以外に、だれしものが本来持っている「輝き」に気付きつつある。他人と比べることによって自分を評価し、無力感を覚え、それでも「笑い続ける」ことでしか自分の存在を肯定することができなかつた子どもたちが、ある日「泣くこともできる」ことに気付いて、「少しだけ救われたような気がした」のである。本人や周りの人たちがこのような「輝き」に気付くことが、お互いの「弱さ」を肯定的に受け止め合うことのできるなかま集団づくりにつながるものと思われる。

5 研究結果と考察

この1年、「人権意識の高揚を図り、よりよいなかまづくりを目指す」という学年テーマのもと、アサーティブネスと自尊感情を基礎に据え、人の「輝き」に焦点を当てた人権学習ホームルームの内容を工夫してきた。またそれぞれのホームルームに関連性をもたせ、ホームルームでの「気づき」をふだんの生活の中で深められるような工夫も試みた。これらの学習に刺激を受け、自他の存在を尊重しながら、なかまとつながっていくことの大切さに改めて気付いた子どもたちも多いように思われる。

子どもたちが綴った内容には、ふだん私たち教員が見落としがちな心の動きがいくつも表れていた。「尊敬」「あこがれ」「ひがみ」「ねたみ」「さげすみ」……、それらはきょうだいの中にさえ存在することも子どもたちは教えてくれた。このような感情の機微を、糸を紡ぐようにていねいに子どもたちの前に返していくことで、彼らはお互いの中に新しい発見をし、それに共感し合いながら自分自身を見つめることができたように思われる。

この取組を通して、一連の人権学習ホームルームの展開においては、テーマを明確にし、そこで学んだことや感じたことを整理しながら、次の学習につなげていくこと、また子どもたちの思いや意識を明確に把握して、それをていねいに返していくことの大切さを痛感した。人権学習は、生徒と教員との継続的なコミュニケーションの上に成り立つものなのである。そして同時に、私たち教員としては、ふだんの教育活動の中で、子どもたちの「輝き」に気づき、それをうまく引き出せているかを改めて問われる研究でもあった。

6 おわりに

効果的な人権学習ホームルームの展開について考察してきたが、言うまでもなく、生活のあらゆる場面が人権学習の機会であり、実践の場である。ホームルームは時間も限られており、「他の生徒との意見交流や様々な人生の有り様との出会いの中で、新しい価値観に気付く機会」「これまでの学習と経験を総括し、今後歩むべき方向を見定める機会」として有効に活用したいものである。この1年間で培った人権尊重の基本的な態度や姿勢を、次年度の学習へと生かしていきたい。